

## 第3回

観光ガイド育成検定試験

# 【中級】

平成21年11月15日

### 注意

1. 開始の合図があるまでは、答案用紙を開かないでください。
2. 開始後30分が過ぎる前に会場を退出することはできません。

次の1から7までのテーマに関する文章をよんで、【1】～【45】の番号の設問（別紙）に該当する答をひとつだけ選んで○をつけるか、（ ）の中に当てはまる言葉を記入してください。設問と回答は、別紙です。

### 【1：開拓以前】

明治以前の尻別川は、ある時期まで流域全体が【1】イソヤアイヌの漁業区でした。しかし、各所に越えがたい激流ポイント（ブイラ）があったことから、そのポイントを境に、下流、中流、上流で漁区は大きく3つに分割されるようになりました。河口付近下流域の漁業区はそのまま【1】イソヤアイヌの漁業区ですが、中流域に当たる倶知安の支流ソウスケ川付近は岩内から入ってきた【2】イワナイアイヌの漁業区となり、上流域喜茂別のルサンあたりは、虻田や有珠方面から通ってきた【3】アブタアイヌ、ウスアイヌの漁業区となりました。この3箇所は、その後【4】松浦武四郎の丁巳（【5】安政4年）の調査の際にも、尻別川に接近する際の3つの入り口となったのです。初めに磯谷から、次いで岩内からソウスケに入った武四郎は、そこから尻別川全体に調査を進めることは出来ず、結局、【3】アブタアイヌの通い道に沿ってルサン付近で尻別川に入ること、上流と下流それぞれに探索を進めることが出来たのです。アイヌの3つのサケの道が、【4】武四郎の3つの探索導入経路となり、さらにこの3つの経路は、その後、開拓入植者の主な入地ルートとしても活用されることとなります。裏日本からの入植者は、主に日本海岸沿いに北上して磯谷地区へ入地します。また倶知安ソウスケ川地区への入植者は、主に仁木、余市、岩内方面から入地し、その後ニセコ方面や京極方面へと広がりました。そして留寿都、喜茂別、真狩への入植者は、内地から虻田、有珠、洞爺を經由し入地しています。

これらの3つのルートの中で、最も早くから開けていたのは磯谷地区です。17世紀中ごろには既に漁業などに従事する和人が磯谷地区に住み着き、シャクシャインの乱では死者も出ています。さらに18世紀初頭から、磯谷地区の尻別川流域は、エゾマツの伐採事業を進めていた飛騨屋久兵衛の請負地区として開発が進められ、多くの和人が入り込んでアイヌとの混住が進んでいました。尻別川流域で伐採されたエゾマツなどは、激流ポイントを超えて流送するのが容易ではないことから、黒松内や余市、雷電などへの山道も切り開かれ、馬で搬出されるようになったといえます。このように、磯谷地区は漁業だけでなく、林業や自給程度の農業も行われるなど、当時の産業の集積拠点として発展し始めていたのです。当時蝦夷地への進出を目論んでいたロシアに対抗し重要な場所を警固するため、安政6年、幕府は庄内藩にその地の警衛を命じたのでした。そして10年後、明治維新を迎えます。

### 【2：幕末余韻の時代】

明治2年、開拓使が設置され、蝦夷地が「北加伊道」即ち北海道と命名されると、北海道開拓の最初の仕組みが動き出しました。それまで蝦夷の各地に点在し経済的なまとまりを形成していた「場所」請け制度が廃止され、そのエリアの多くは「郡」として再編され、郡ごとに【6】諸藩分治と称される仕組みが導入されました。羊蹄山麓は大きく磯谷場所と虻田場所に分かれていたことから、磯谷郡と虻田郡が誕生します。【6】諸藩分治という制度は、明治維新によって地域経営が困難になった諸藩に対し北海道内に藩の経営領地を認める、というもので、いわば藩をまるごと北海道に移住させて、藩士に開拓の担い手になってもらおうという構想でした。磯谷郡には米沢藩と五島家、虻田郡には庄内藩（大泉藩）が進出します。しかし、武士階級にとって、未開の大地で自らクワを振るうというのは大変なこ

とです。明治政府の意向に従って北海道の経営に手を染めたものの、諸藩のほとんどは早々に限界を露呈します。例外的に定着したのは、伊達紋別の亙理藩、当別の岩出山藩、静内の稲田藩でした。この制度は、廃藩置県の翌年明治5年には廃止され、北海道全土が開拓使に編入され、定住した3つの藩士にあっても、多くは武士から平民に降格され、一般の移住農民に準じた扱いを受けることになりました。

【6】諸藩分治の時代でこの地域の開拓にとって大きな意味があったことの一つに、【7】本願寺道路が開削されその沿線に【8】駅通が創設されたことが挙げられます。【7】東本願寺宗派が明治政府と関係の改善を図るうえで取り組んだ事業が、函館から札幌までの内陸道路の開削工事です。このコースの一部、虻田から札幌までは、【4】松浦武四郎の【9】戊午の調査ルートを通ったもので、現在の【10】国道230号の前身です。開削工事には、【7】本願寺の僧侶だけでなく、信者、アイヌ、伊達に移住してきた亙理藩士たちも参加しました。明治3年の着工から1年半後の明治4年に竣工しますが、竣工後、東久世通禧、副島種臣ら政府の高官が、現地検分を行うため札幌から定山溪、中山峠を通過して伊達まで踏破し、伊達邦成や田沼頭允らに【8】駅通の開設を要請します。明治4年、伊達の【11】阿部嘉左衛門ら3名が喜茂別の相川あたりにはじめて【8】駅通を設け、喜茂別町と留寿都村の礎となります。【7】本願寺道路は、その後峠越えの難所など不利な条件があったことからさほど利用されずに荒廃し、明治5年から開削工事が始まった千歳、苫小牧経由の【12】札幌新道に主役の座を譲ります。また同年、【6】諸藩分治制度が廃止されたことで、行政区として新たに戸長役場「村」が設置され、既に和人の入植が進んでいた蘭越の港地区に「【13】尻別村」が設置されました。

### 【3：【14】永年社戦略の時代】

明治5年、【6】諸藩分治の制度を廃止した開拓使は、行政の仕組みとして「村」を設置し、郡区町村といった大小の区画化を行うとともに、開拓の新たな制度として「北海道土地売貸規則」「地所規則」を制定しました。これは、北海道の開墾を希望する者に土地を安く分譲し、開墾成功までの一定期間税を免除するという優遇制度でした。しかし、この制度が廃止される明治15年までの間、羊蹄山麓では目立った開拓の動きはなく、【13】尻別村で漁業関係者などによる土地開墾がわずかに進められた程度でした。むしろこの時期は、伊達に創設された【14】「永年社」による様々な産業振興策の影響が、羊蹄山麓にも波及して来た時代となったのです。

【6】諸藩分治制度を廃止し移住士族の身分を平民に降格したことは、伊達に移住してきた亙理士族の開拓の意欲を大いに損なうことになりました。そこで開拓使は、彼らに一般移住農民と同様の経済的優遇策、すなわち金品の供与と移住経費の肩代わりを提案したのです。伊達の人々はこれらの多くを貯蓄し、明治9年、それらを原資に【14】永年社という組織を創設しました。【14】永年社というのは、亙理からの移住者全員を社員とし、共済、慶弔、物産振興、移出販売、船舶輸送、製糖、農場経営、牧場経営、【15】硫黄採掘などを行う、一種の共済組合あるいは産業組合のような組織でした。この仕組みによる地域経営を指導したのは、旧藩主である伊達邦成と筆頭家老の田村頭允でした。特に実質的なリーダーであった田村は、【14】永年社設立の直後に虻田郡内を調査する旅に出て、ニセコアンベツ川で【15】硫黄の新たな鉱脈を発見し、3年後の明治12年には【16】イワオヌプリの【15】硫黄鉱山採掘の権利を得て【15】硫黄を増産します。伊達とニセコ山系【15】硫黄鉱山を結ぶ道の間にあたるのが、かつて【8】駅通を置いた喜茂別相川ですので、【14】永年社創設の一環として【11】阿部嘉左衛門に命じて【10】駅通を再建します。かつて開拓使の戦略によって設置された喜茂別相川の【8】駅通は、今度は【14】永年社によるニセコ開発という戦略のために再建され、羊蹄

山麓に新たな開発の波が訪れるきっかけを作り出すのです。丁度この時期は、内地で政府の緊縮財政により経済のデフレ傾向が強まり、企業倒産と失業が広がったことから、北海道への移住志向が強まった時期でした。しかし開拓使は、この時期においても、開拓を促進する有効な制度を何ら打ち出すことが出来なかったのです。

#### 【4：開拓停滞の時代】

明治15年、開拓使が廃止され、三県一局制が敷かれました。これは、北海道を三分割して札幌県、根室県、函館県を設置し、地域特性に見合った統治を目指したもので、道外の県とは違い県議会などの自治機能はありませんでした。この三県一局時代は明治18年まで続きましたが、この間、開拓促進策にはとりたてて見るべきものがなく、また、市場経済の波が北海道にも押し寄せてきた時代の変化に対応できなかった【14】永年社も、明治17年には活動を事実上停止し、【15】硫黄鉱山の経営権も明治19年三井物産に譲渡しています。近代的な【15】硫黄採掘工法へと移り行く、時代の大きな境目でもあったのです。ちなみに、三井物産による近代的な【15】硫黄採掘は昭和12年まで続き、日本の産業発展を支える原動力の一つとなったのです。この時代、明治15年には、その後の羊蹄山麓7町村誕生の母村となった【17】虻田村が誕生しています。そしてもうひとつ、この地域の歴史に大きな影響を与える出来事がありました、

明治18年、岩内の佐藤亀太郎という人が、ニセコ山系【18】チセヌプリの南麓で【19】大湯沼を泉源とする間欠泉を発見します。当時【18】チセヌプリ南麓では、英国ハウル社が【15】硫黄を採掘していました。佐藤は岩内の漁業資本家から資金援助を受けて湯治宿を建て、馬場温泉とします。これが、その後経営者が変わって現在の【20】湯本温泉となります。ニセコ山系で最も古いこの【20】湯本温泉は【15】硫黄鉱山を母体に誕生し、ニセコ山系が【15】硫黄産出の山から温泉観光の山へと変わっていく大きなきっかけとなったのです。

#### 【5：【21】殖民地選定の時代】

明治19年、三県一局が廃止され、北海道庁が設置されます。北海道庁はこの年、「北海道土地払下規則」を発令しました。北海道の開拓は、この制度の発足によって大きく前進します。従来の制度は、北海道内の土地を素地のまま、どんな特性の土地なのか十分な情報がないまま売却していましたが、今度は、「【21】殖民地選定5カ年計画」に基づいて道内の主要な原野を全て測量し、その土地の特性に関する情報をまとめ、どのような用途に適している土地なのか評価を加えた上で選定し、一定の面積を入植希望者に提供し、所定の年限で開墾に成功した人にその土地を払い下げる、という制度でした。現在の新十津川の原野を手始めに、全道各地で測量が行われ、羊蹄山麓では明治22年までに倶知安原野などで測量が実施されました。明治29年まで続けられた測量の結果は「【21】殖民地選定報告」として公示されたことから、これをもとに入植を希望する「出願」が各地に殺到したと言います。

この時代、羊蹄山麓の開拓促進に寄与するもうひとつの大きな出来事がありました。開削直後から荒廃し続けてきた【7】本願寺道路のルートを再開発する道路工事が明治23年から始まり、明治27年に竣工したのです。【7】本願寺道路とは一部コースが異なるこの道路こそ、後の【10】国道230号の原型となったのです。この道路「仮定県道札幌虻田間」の開通に合わせて、喜茂別では【11】阿部嘉左衛門が路線沿いの尻別地区に【8】駅通を移し、道路工事に携わった人たちも別の【8】駅通を立ち上げました。

【21】殖民地選定の影響は、ほぼ全ての地域に波及しました。原野の測量調査を伝え聞いた人の中から、開拓の先駆者が生まれます。留寿都村（当時は虻田村）では、明治19年橋口文蔵が土地の払下げを受けて米国式の機械化大規模農場を導入しますが、失敗して明治24年に加藤農場となります。また、【21】殖民地選定報告で倶知安原野の可能性に魅力を感じた仁木村の仁木竹吉の呼びかけに応じ、仁木、余市、岩内の同志が共同で出願の組合を作り株主を集め、【22】明治25年に【23】山田邦吉ら15名がソウスケ川合流地点あたりに入植します。この年を、倶知安町では開基としています。しかし、倶知安からニセコにかけての一带は【24】御料林となっていたことから土地払下げの出願は認められず、出願組合は一旦解散します。彼らの一部は、倶知安の尻別川沿いに立地していたマッチの軸木工場などで就労し、再出願のときを待ちます。そして明治27年、【24】御料林が開放され官林に編入されたことで、倶知安原野には様々な農場、移住団体などが入植したのでした。また、【24】御料林が解除されたニセコにおいても明治29年に【25】松岡農場が進出し、その後の大農場によるニセコ開拓のはじまりとなることから、ニセコ町ではこのときを開基としています。真狩においてもマッカリ原野の区画整理に伴って個人移住者が入植し、なかでも神原弥吉らが入植した明治28年をもって真狩村の開基とされました。蘭越においても、石川県から集団入植が行われるなど開拓は進みました。

この時代、温泉の開発も引き続き行われ、明治27年には倶知安にはじめて入植した【23】山田邦吉ら3名による山田温泉の発見（営業開始は【26】明治30年）、明治29年には磯谷地区の成田元吉による成田温泉（後の【27】薬師温泉）が発見されました。成田温泉も、磯谷地区の漁業資本家の資金支援により営業が行われています。このような入植開拓の進展により、特に入植が多く定住者が増えた倶知安では、【28】明治29年虻田村から倶知安村が分村し、戸長役場が設置されました。現在の京極町地域を含めての分村でした。

## 【6：入植と開拓の本格的展開の時代】

【29】明治30年、それまでの土地払下規則に替えて、「北海道国有未開地処分法」が發布されました。これは、開拓予定の土地を無償で貸付け、開拓が成功したときに無償で付与する、という制度で、付与を基本としつつ、売却、交換、貸付なども組み合わせるといって、多様で柔軟な仕組みとしてスタートしました。

この【29】明治30年、【30】旧丸亀藩主京極高德子爵が貸付の出願をしました。この【31】京極農場設立の年を、京極町では開基としています。【31】京極農場は代々優れた管理人に恵まれたことなどから安定的に発展し、農場の一部が市街地になって、明治43年には【32】東倶知安村として倶知安村から分村するほど発展しました。京極村と改称されるのは、昭和15年です。また、明治31年には、【31】京極農場の開墾指導者藤村徳治が【33】ワキカタサップ川の上流で鉄鉱石の鉱脈を発見し、大正5年に【34】三井鉱山が採掘権を得て協方鉱山として本格的な採掘を進めるきっかけとなりました。後の大正8年に倶知安から京極まで鉄路京極線が敷かれるようになったのも、協方鉱山で採掘された鉄鉱石を室蘭に輸送することを主たる目的としていましたので、羊蹄山麓の広域交通網が整備されるようになった背景として、【31】京極農場の存在が大きかったと言えます。

大農場がまちの開基となった京極町と似ているのが、大農場【25】松岡農場が開設された明治29年を開基としたニセコ町です。当時狩太と称されたこの地区は、【25】松岡農場以降も次々と大農場が開設されましたが、中でも有名なものが、明治32年に開設された山本農場（後の【35】有島農場）であり、翌明治33年に開設された曾我農場です。特に山本農場は、その後明治41年にアメリカ留学か

ら帰国して北大に戻った有島武郎に名義が変更され、【35】有島農場となりました。大農場が次々と開設されたことにより小作人の入植が進み、明治34年に真狩村から最初に分村して、【36】狩太村が誕生しました。また明治32年は、尻別村が南部蘭越地区の南尻別村と北部港地区の北尻別村に分村した年でした。蘭越町は、この分村を開基としています。ちなみに、南尻別村と北尻別村は昭和29年に再度合併して蘭越村となっています。

この時代最大の出来事は、明治37年の【37】北海道鉄道の開通でしょう。函館から小樽までの幹線鉄道が開通し、各駅を拠点に殖民道路も拡張されたことにより、内陸への入植・開拓は飛躍的に拡大し、その後の団体入植にも大いに寄与したのです。北海道鉄道は、また羊蹄山麓の新たな観光開発にも大きな役割を果たしました。比羅夫駅に降り立った旅行者を【38】蝦夷富士羊蹄山の登山に誘う山岳観光戦略だけでなく、蘭越、倶知安地区では温泉の宣伝に力を入れました。特に、比羅夫駅に近い山田温泉、昆布駅に近い成田温泉、馬場温泉、宮川温泉、新見温泉、そして昭和の末まで一世を風靡した青山温泉など、ニセコ山系各地の温泉地が、一気に観光の最前線に躍り出てきたのです。

入植・開拓が一気に進んだこの時代には、大農場など資本の導入は大きく前進したものの、不在地主と小作が増えたことや、投機的な土地漁りも横行するようになったことから、自作農向けの新たな土地は少なくなる一方でした。このままでは健全な農業開拓とは言えない、そんな閉塞感が北海道全体に広がってきた明治39年、自作農による自由な農場創造を目指した平民農場が留寿都地区に生まれ、また二級町村制が施行され第1回村会議員の選挙も行われました。平民農場は2年後に早くも挫折して童謡「赤い靴」の悲話を残しましたが、第1回村会議員選挙の実施はその後の地方自治制度進展の一里塚となりました。

## 【7：自作農創出支援の時代】

明治41年、「北海道国有未開地処分法」が改正されました。耕作目的の居住地を特定することで不在地主化を防ぎ、自作農に対する無償貸与など支援を手厚くする内容となりました。また同年、団体入植に対する優遇策の条件を緩和し、団体移住がしやすくなるような措置も講じました。団体移住については、明治25年に30戸以上を団体移住とみなす規定が定められていましたが、明治39年には20戸以上、そして41年には10戸以上、と条件が緩和されたのです。この団体移住支援策を活用して、各地で団体移住が増える傾向にありました。特に規模の大きな団体移住として、明治41年から始まった【39】山梨団体があります。京極、倶知安、喜茂別に延べ数百戸の移住が見られ、その後の各地の分村運動に少なからぬ影響を与えました。他にも、福島団体、阿波団体、越中団体、南部団体、群馬団体などが各地で展開されました。しかしその多くは、すでに良好な農地が少なくなっていたことなどから開拓がうまくゆかず撤退していきませんが、一時的であれ地域の人口が急増したことにより地域経済と地域社会に大きな影響を与えたことから、分村、自立の流れを加速させました。明治43年には倶知安村から【32】東倶知安が分村（昭和15年に京極町に）、大正6年には真狩村から【40】喜茂別村が分村、そして大正11年、真狩村から【41】真狩太村が分村し、現在の羊蹄山麓7町村それぞれが自立したのです。真狩村は大正14年に留寿都村と改称し、【41】真狩太村は昭和16年に真狩村に改称しています。

団体入植が行われしかもその多くが撤退したことで、北海道への入植と開拓の時代は一段落したことになります。明治の終わり頃です。この間にニセコ山系の温泉の開発もほぼ出揃いました。明治41年には岩内の新見直太郎によって新見温泉が発見され、翌明治42年には青山温泉で【42】不老閣が営

業を開始し本格的温泉旅館の幕開きとなりました。この青山温泉【42】不楼閣を拠点に大正8年から北大スキー部の合宿が始まり、また大正10年に【43】宮川温泉を拠点に小樽高商スキー部の合宿が始まることによって、ニセコ山系は本格的な温泉とスキー観光の曙を迎えたのでした。【44】五色温泉も大正9年に営業が開始され、経営者の一人稲村道三郎が、倶知安からのアクセス道路を開削しています。昭和2年の【45】紅葉谷温泉開業により、今日のニセコの温泉はほぼ出揃い、その後は、平成元年に青山温泉が廃業するまで、温泉の栄枯盛衰が続いたのです。

大正となったこの時代、羊蹄山麓の開拓時代を締めくくる二つの歴史的出来事がありました。ひとつは、大正5年に【34】三井鉱山株式会社による脇方鉱山の開発が始まり、室蘭へ鉄鋼石を輸送するため大正8年に倶知安から京極まで京極線が開通し、同年脇方鉱山まで延線され、さらに昭和3年喜茂別まで鉄道が引かれ、昭和16年には胆振縦貫鉄道が開通され、戦時下における鉄鋼石の需要拡大に大きく影響したのです。昭和19年に国鉄となった胆振線は昭和61年に廃線となり、その歴史的役割を終えています。

そしてもうひとつは、大正11年の有島武郎による【35】有島農場の解放です。有島武郎は自身の思想的信念から小作農の存在に苦しんでいました。水田灌漑工問題をきっかけに国から圧迫を受けながらも、有島は自らが所有し経営していた全農地を、農場の小作人に無償で解放したのです。この農場開放はその後、他の大農場にも波及し、昭和13年の【31】京極農場の解放に至るまで、この地域の農業経営のあり方に極めて大きな影響を与えたのでした。しかも、【35】有島農場の解放は、単に農場を小作人個々人に無償で分け与えたのではなく、小作人全員が共同で農場を経営することを条件に無償で譲渡したのです。狩太共生農団利用組合が大正11年に設立され、有島の理想実現に向けた第一歩が記されたことを見届けたかのように、翌大正12年、有島武郎の自殺が報じられました。自作農の推進を目指した北海道庁の開拓政策とは全く異なる理念と方法で、有島武郎は北海道開拓の歴史を新たな地平に向けて解放したとも言えます。